

東方記憶録～思い出が 織り成す物語～

高麗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十六夜咲夜と

神威剣斗の

過去を旅します

(多分)

目

次

始まり

第1話

出会い

第2話

始めての戦闘

第3話

弾幕とスペカ

第4話

宴会

白玉楼

第5話

楼観剣・【闇】

第6話

教えてください剣斗くん！

60

51

42

22

9

1

始まり

第1話　　出会い

私は十六夜咲夜。紅魔館のメイド長を勤めています。

今はレミリアお嬢様や妹様などと一緒に住まわせてもらつて毎日が楽しいです。

皆さんご存知でしようがここ、幻想郷には毎度毎度異変が起きます。

そしてその大きな“異変”が関わっている不思議な不思議な物語です。

私はその日、紅魔館の食材がきれそだつたので買い物にいつていた。

買い物は順調に終わり紅魔館に戻ろうとしていると、急にいかにも‘悪者’みたいな男性四人が私に話しかけてきた。

「姉ちゃんかわええなあー」

「ちょっと俺らと楽しいことしよーや」

みたいなことを言つてきて手を掴まれた。

私は「やめた方がいいですよ」

と忠告したが、彼らは「黙つてなー」とか言つてきて私が攻撃しようとしたその時

ドーン!!!!!!

と、もゆすごい爆発音と凄まじい閃光が起きた。

男性四人は驚いて逃げていったが私はそこにたたずんでいた。

それが起きた場所は紅魔館の方角だったので嫌でも通らなければいけなかつた。ついでに見てみると

「うわあ…」と、思わず声が出てしまつた。

そこには隕石が落ちたようなあとがあつた。

そしてそのあと、クレーターのようになつた場所から「あうう…いてて…」と言う声が聞こえてきた。

「え…？」と驚いていた。

私と同じぐらいの歳の男性だつた。

「あ…そこの女人の人!!あのここはどこか知らない?」

「ここは幻想郷よ。」

「なるほど。大体はわかつた。」

今のでわかつたの…?と少し動搖した。

私はなぜそこにいるのかと思い、

「そんなんところで何してるの?」と聞いた。

そしたら「うーん…わかんない。」と答えた。

話を聞くと隕石と一緒に落下した?らしい

その衝撃で記憶がとんだということも

とりあえず泊まるところがなかつたようなので
レミリアお嬢様に許可をとり紅魔館の一員になることを条件に住まわせることにし
た。

妹様は新しいに家族おおはしゃぎでその男性と遊んでいた。
レミリアお嬢様が唐突に「あなた名前は?」と聞くと

「神威。神威剣斗だよ。」と答えた。

妹様が

「けんとー弾幕ごっこしょー。」といいだして急に
剣斗に攻撃しだした。

私はその時剣斗のことをなめていてすぐ終わると思つていた。
しかし違つた。

剣斗はスレスレで妹様の濃い弾幕をすべて避けていた。

「ちよこまかとー!!卑くあたれー!!」

「当たりたくないよ!!!!」

というかんじになつていた。

そして、妹様が疲れて寝てしまつた頃
外は夕焼けが見えていた。

そうすると「キヤアーーー!!」という美鈴の悲鳴が聞こえて、妹様以外の紅魔館の全員がそこに駆け寄つた。

そこには、吹っ飛んだ美鈴と男の妖怪が立つていた。
そしていきなりその男の妖怪がものすごく濃い弾幕をうつきたのである。
それには誰も避けられず全員が倒れた：

かと思つた。

剣斗が立つていた。

しかしその妖怪は明らかに殺傷能力のあるレーザーを放つた。

ドゴオー————ン!!!!!!

そしてそのレーザーは剣斗にもろに当たった。

しかし剣斗は無傷だった。

これにはあの妖怪も動搖は隠せなかつた。

剣斗の瞳と髪のいろが変わつていた。

そしてこういった…

「すべて思い出した…。俺はもう一度。もう一度咲夜を守る…!!」と。

皆さん始めまして

!!!!!!!

これから気まぐれに連載していきます♪

最初はこんな感じで始まります w

多分今後もこんな風に短いと思います w
御了承ください。

僕は全然小説とか書いたことなかつたので面白くないかもしませんがよろしくお願ひいたします!!

えーと

剣斗くんは

最初は髪のいろが紺色で目の色が緑です。

そこのところ覚えていてください。

最後までお読みいただきありがとうございました!!

第2話 始めての戦闘

俺は神威剣斗。

今回は俺の視点から見ていく。
てなわけでよろしくな。

では本編

♪前回は♪

咲夜「剣斗の髪と瞳の色が変わった…!?」

剣斗「すべて思い出した…俺はもう一度。もう一度咲夜を守る…!!」

僕は殺傷能力のあるレーザーをもろに当たつてしまつた。

そうすると自分の体の中からものすごいエネルギーが溢れ出たのがわかつた。
最初は自分でも何が起きたのか分からなかつたが、その莫大なエネルギーが自分の物になつたと分かつたとき自分のとんでいた記憶を取り戻した。
そしてなぜか咲夜がかなり動搖していたのが分かつた。

（なぜ動搖しているのかは分からなかつたが）

そして自分の記憶を取り戻したときは気持ちが高ぶつてすべて思い出した氣になつていた。

そして「すべて思い出した…俺はもう一度。もう一度咲夜を守る…!!」

しかしまだすべての記憶を取り戻した訳ではなかつた。

そう言つた。
とりあいづこの妖怪を倒すことが先だ。と判断した俺は相手に殴りかかつた。

移動したスピードは先ほどエネルギーが自分の物になる前より格段に速くなつてい

た。

自分のスピードに追いつけないかと思つたがこれまた反射神経も研ぎ澄まさっていた。

そのパンチは見事命中。

ドゴツ!!

と鈍い音をたてて妖怪は吹っ飛んでいった。

やつたつ!!と思つたが妖怪はすぐに立ち上がつた。

それを前に少し動搖する。

そうすると自分でもよく分からぬ力がてにまとわりついた。

これはもしかして。と思いその力を手に纏つた。

「そこの髪のいろと瞳の色が変わった野郎。お前名前はなんと言う。」

髪のいろと瞳の色が変わった?よく分からぬが俺のことだと思い答えた。

「俺は神威剣斗だ。」

あれ?俺つていつから一人称、俺になつたつけ。

まあいい。

「お前の名前は?」と聞き返した。

「俺は五十嵐九尾だ。」

なぜ尻尾がないのに九尾なんだ?と思ったがそれは関係ない。

「なぜ紅魔館を襲つた?」

「全ての者の過去を奪うためさ!!」

と意味が分からぬ返答をされた

「いくぞ。剣斗!!!!!!」

そう言われて俺は身構えた。

シュンツ!!

え?と思つた。

敵が目の前から消えたのだ。

俺は他人から見ても動搖しているように見えたはずだ。

ドスツ!!!!!!

またしげ!も動搖。

横腹に激痛が走った。

それから自分は蹴られたのだ。と理解するには時間がかかった。
その瞬間俺はこう思つた。

(強い!!!!)

しかし俺はすぐに立て直し相手に向かつて走った。

「ハアツ!!!!」

「うあつ!!」

ドゴオーーーーーーン!!!!!!!

俺の拳は完全に相手を捉えた。

筈だつた：

地面にめり込んでいたのは俺の拳だけ。

「何処へ行つた!？」

「こゝだよ…。」

九尾は俺の上にいた。

完全に油断した：

そう思つた瞬間俺の足に力が入つた。

そして高速で間合いをとつた。

それには俺自身もびっくりで九尾も動揺を隠せなかつた。咲夜もレミリアもまあそこに入った全員がびっくりした。

そしてその力を今度は蹴りに使うことにした。
もちろん命中。

その蹴りの威力は凄まじいもので九尾の肋骨が何本も折れるような音がした。

そして俺は絶対に勝つた。

そう確信した。

その確信は当たっていた。

まあ、あの蹴りをくらつて立てるやつがいたら凄いもんだ。

そして俺の始めての戦闘は勝利に終わつた。

そして倒れていた紅魔館の全員が駆け寄ってきた。
そしたら咲夜はえ？と言つた。

「髪のいろと瞳の色が元に戻ってる!?」

そうするとみんなが

「本当だ。」

「元に戻ってる。」などとよく分からないとを言っていた。

僕は咲夜に

「どう言うこと?」と聞いた。

あれ、一人称が僕に戻ってる。

「自分で分かつてないの」

「うん。まつたく。」

「剣斗の髪のいろは紺色で目の色が緑よね?」

「うん。そうだね。」

「それが髪のいろは黄緑で目の色がピンクになつてたの。」
え、? ?

それはつまりえーと。

髪のいろと目の色が変わっていた?

思考が停止していた。

実はそれより気になっていたことがあった。

なぜ咲夜を「もう一度守る。」と言つたのかと、九尾が「全ての者の過去を奪うためさ!!」と言つていたことだ。

しかしどれだけ考えても答えは出そうになかったので今は諦めた。

そんなことを考えていると、パチュリーに

「なぜ弾幕とスペカを使わなかつたの?」と聞かれた。

僕はパチュリーの言つていることが分からなかつた。
なのでパチュリーに

「ごめん…。よく分かんないや…。」と答えた。

「じゃあ私が明日弾幕とスペカについて教えてあげるから図書館に来てね。」

「うん。助かるよ。ありがとうパチュリー。」

「パチエでいいわよ。」

「分かつた。」

というわけで明日パチエに弾幕とスペカについて教えてもらうことになつた。

その日の晩御飯は僕が新しく紅魔館の家族になつたことと強大な敵を一人で倒したお礼としてものすごく豪華な食事が並べられた。

「うわあ…。美味しそう…。ジユルリツ」

「当たり前でしよう。うちのメイド長は超優秀なんだからね。」

「ありがたいお言葉です。」

そんな感じで夕御飯も食べ終わつた。

暗闇の空間…二人の男が話していた。

「どうする。」

「まだだ。まだ力を使いこなせないだろう。」

「分かった…。」

どうも高麗です!!

今回は剣斗君の初バトルでしたね。

未だに謎多き少年がこの物語の鍵を握っているでしょう。

そんな初バトルの記念に今回からは

剣斗君と咲夜さんに来てもらうことになりましたー!!

「よろしく〜」

「よろしくお願ひします。」

剣斗君は今回戦つてみてどうだつた?

「自分のよく分からぬ力にびっくりしたよー。なんか自分のことを俺つて言つてる
し。」

「そうだよね〜」

でも君は何か眠つている力がある(という設定にしている)からこれからも頑張つて

「うん。」

!!

じゃあ咲夜さんに質問!!

「はい。」

今回剣斗君が戦つていてカツコいいとか思つたの?ニヤニヤ
力アツ

あ、あれ?咲夜さん?

顔が赤くつなつて、;

シヤキンツ

「殺しますよ?」

すいませんでしたあ!!!!!!!

「まあ次回予告しちゃお!」

「そうね。」

そうだねー。

では次回!

“第3話 弾幕とスペカ”です。

閲覧ありがとうございます。

できれば評価・感想をお願いします!!

では

「「「次回もお楽しみにー
!!!!!!!!!!」」

第3話 弾幕とスペカ

今回からは視点がコロコロ変わります!!

御了承ください…（泣）

では本編

♪前回は♪

「何で弾幕とスペカを使わなかつたの？」

「なにそれ…。」

s i d e 剣斗

パチエに昨日弾幕とスペ力を教えてもらうことになり図書館に来てと言わされたので向かつていたのだが…

そこでは咲夜が倒れていた。

「なぜッ!!!!!!」

!!!!!!

取り敢えず駆け寄った。

その瞬間なぜ倒れているか分かつた。

「こいつか…。咲夜をやつたのは…。」

そいつの名前は

「G イイー————ツ
!!!!!!」

ゴキブリだつた。

毎日掃除しているのに出るゴキブリも不思議だが咲夜がゴキブリで倒れる方が不思議だ。

「いつもはあんなにしつかりしてるので…。」

取り敢えずゴキブリを倒そう!!

バツチイーン

ドゴオ――――――
!!!!!!

「あ、、ヤバ、、。」

床が抜けていた。

そのあとレミリアに叱られ修理させられたのは言うまでもない。

「あーあ。時間とつちゃつたなー…。」

ガチャツキイー

すごい音のなるドアノブだ。

「ゞめんパチエー。遅くなつちやつたー。」

返事はない。

「パチエー?」

「はーい。」

あついた。

本棚からひょこつと顔を出した。

こんな人が何百年も生きてるんだよなー。

なんかすごい。

そもそも人なのかもわかんないけど、；、

s i d e パ チュ リー

「弾幕ごっこは殺傷能力のない弾幕戦うことで、何かを賭けているときは負けた方がそれをしないといけないの。」

「なるほど。じやんけんみたいな感じ？」

「そうね。イメージ的にはそんな感じかしらね。」

我ながら完璧な説明ね…。

「で？その弾幕ってどうやってだすの？」

「まずは手のひらに自分の中にある力を溜めて…。」

「なるほど。」

シュンツ

剣斗の髪のいろと瞳の色が変わったわね。なぜか研究してみないとね。

「そうしたら、この力を具現化するイメージでフツ!!」

ポウン

「おおー…。」

「さあ。やつてみて。」

「ハアツ!!」

ボオン

「よしつできたぜ?」

「それを私に撃つてみて。」

「いくぜっ!!どりやあーーーーーッ

!!!!!!!

「魔法壁!!」

ドンドンドンドゴオーン

「なかなかの威力ね……。」

すごいわね……。あれだけの説明ですべて成し遂げるなんて。次はスペカについて教えようかしら。

「オッケーよ。次はスペカについて教えてあげるわ。」

「おう。頼むぜ。」

「まずスペカがどんなものか教えるわ。」

「スペカとは、スペルカードの略称で弾幕で戦う弾幕ごつこの必殺技みたいな感じね。」

「なるほど。」

「その効果は色々で攻撃系や回復系、強化系など色々あるわ。」

「フムフム⋮。」

「じゃあここに紙があるからスペカを作りてみましょうか。」

「フムフム⋮つてえええええええええツ!!!!!!スペカつて作れるの!!??」

「ええ。作れるわよ。しかも可能性は無限大なのよ。常識にとらわれないことがコツ!!ね。」

「なるほど。」

「作り方は?」

「まずスペカに向かつて自分の想像を送り込む⋮。そしたら出来上がるわよ。」

「説明雑だな。」

s i d e 剣斗

「できたあ！」

パチエの教えがあつて僕は弾幕とスペカを理解することができた。多分もう実戦もできるはずだ。

「分かったわ。じゃあ試しに私と戦つてみましょう。」

なぜそくなつた。

よく分からぬけどパチエと戦うことになつた。

「じゃあいくわよ!!!!!! ハアツ!!!!」

パチエの後ろに大きな魔方陣が現れてたくさんの弾幕がこつちに向かつて飛んできた。ギリギリ全部よけれたけど危なかつたあー。

「じゃあこつちも行くぜッ!! オオオオオツ!!!!!!」

!!!!!!

自分の後ろにかなり巨大な魔方陣が生成されそこから色々な色の弾幕が打ち出された。これにはパチエもさすがに対応しきれず何発か当たつた。

そんなとき、俺たちは外にいたのに急に図書館の方で何かが壊れたような音がした。

「なんだなんだ?」

「“奴”ね:」

「奴? つて誰?」

取り敢えず図書館にいつてみた。そしたらドアが破壊されていた。

「誰だこんなことしたのは!?」

「これも奴の仕業よ。」

「だから奴つて誰?」

奥からガサゴソとなにやら音が聞こえた。

目を凝らすとそこには白黒の服を着て簪を持っているいかにも魔女 o r 魔法使いですよーみたいな感じの金髪の女子が立っていた。

そうしたらパチエに

「剣斗!! あいつ!! あいつを倒して!!」と言われた。

「ええーっ。」

「おっ。やんのか兄ちゃん。」

と言いながらジリジリとよつてくる金髪女子。

あーもうやけくそだ。

「やつてやる!! お前名前は!!」

「私は霧雨魔理沙だ。お前は…？」

「俺は神威剣斗!!」

「それじやあ」

「いくぜッ!!!!」

!!!!!!

最初に攻撃してきたのは魔理沙だつた。

箒に乗りカラフルな星を振り撒きながら突っ込んできた。

「あぶなつ!!」

「当たれよ!!」

「当たらねーよッ!!」

「もういつちよいくぜッ!!」

「ハアツ!!」

魔理沙が箒に乗つたまま俺に殴つてきた。

たとえ女子の貧弱パンチとはいえ箒に乗つたままなのでそれなりの勢いはついている。

せめて俺の内臓を痛め付けるぐらいの力はある。

「ガハアツ!!」

俺は口から血を吐き出してしまつた。

俺はちよ身どキレた。本氣で弾幕を撃とうと思つた。
「オラアアツ!!!!」

!!!!!!

俺の魔方陣は魔理沙を取り囲むようにして配置され、回りから無数の強力な弾幕が飛んで行つた。もはや蜂の巣状態だ

これには魔理沙も慌てたらしくスペカを使つてきた。

「スペルカード発動!!!」

「恋符 マスターはパーク」
!!!!!!

俺も黙つてはいねい。

「スペルカード発動!!!」

「真似符 白紙!!!」

「何も起きないぜ!!!!お前の敗けだ!!剣斗!!」

マスター・スパークは俺の目の前まで来ていた。

「どうかな？」

冷静にそういつた。

その瞬間俺の何も起きなかつたスペカが光だしマスタースパークを吸収した。これにはパチエも魔理沙もびっくりした顔をしていた。

そして俺はこう説明した。

「このスペカは相手のスペカのカードを吸収して自分のものにし、始めての発動する技なら倍の威力で、二回目以降なら普通の威力で騒動する!!つまり俺が使ったこのスペカはマスタースパークに上書きされたつてことだ!!!」

「ウソだろッ!!?」

「残念だつたな。俺の勝ちだ。」

ドゴオーリー

「うわああああああああツ

勝ちだ
!!

「強かつたよ、君は。」

「お前髪のいろと瞳の色が…」

「ああ、うん。なんか変わるっぽい」

そんなことを話しているとパチエが駆け寄ってきた。

「すゞいわね…。今のスペカは思いつかなかつたわ。」

「ありがとーね。」

取り敢えず魔理沙を自宅まで送り届けて紅魔館に帰った。

咲夜が

「図書館のドアを壊したのって剣斗よね。直しといてね。」

「え？ 何々？ どゆこと？」

レミリアには

「あなた自分が何をしたかわかってるの？」とか聞かれ

「分かりません」と言いたいのを我慢して取り敢えず謝りドアを修理した。

「つてかこれしたのつて魔理沙だしいいいいいいツツツ

」

暗闇の空間：二人の男が話している

「まだ力は早いか？」

「ああ。まだだな。しかしもうそろそろだな。」

「刀はまだか？」

「刀はもうそろそろいいだろう。」

「分かった。」

どうも!!!!!!
高麗です!!!!!!

剣「やあ剣斗だよ!!!!!!」

今回はこの方に来ていただきましたーー!!

パ「パチュリーよ」

はい。では今回剣斗君が初めてスペカ使いましたけど、どうでしたか？

パ「そうねえ。はつきり言つてとても強いと思うわ。あれつて吸収した後に放つと威力二倍になるんでしょ？そんなの強すぎよ。」

ですよね。でもこれが剣斗君ですから。

剣斗君は魔理沙と戦つてどう思つた？

剣「強いと思つたよ。マスタースパークは特にね。でもやっぱり僕には勝てないね

☆

あんたが負けたら困るから勝たせてるんだよ。でもまあ剣斗君は強いけどね。

剣「ありがとー!!」

そろそろ次回予告しちやおつかー

剣「そうだね。」

パ「ええ。」

♪ 次回 第4話 宴会♪

です。

それでは

「「お楽しみにー!!!!!!」」

第4話 宴会

s i d e 劍斗

僕の顔がまだ弱い光に照らされる。

「んあ…。もう朝か…。」

あくびをしながらそう言つた。
すると

ガチャッ

「おはよう」

咲夜が入つてきた。

「おはよう」

僕たちはいつからかタメ口で話すようになつていた。

「ご飯できてるから早く来ないと冷めちゃうよ?」

「分かった。今からいくよ。」

咲夜が出ていき、一人になつた僕はすぐに着替え始めた。

今日は少しお気に入りの服を着てみた。

まあ、どーでもいいだろうが。

そんなわけで、朝ごはんを食べ終わり歯磨きをしたところでなぜかまた魔理沙がやつてきた。

「あ、おはよー魔理沙。どうしたの?こんな時間から。」

「ああ、ちょっと剣斗に話があつてさ。」

「何?」

「今日の昼から博麗神社で剣斗が幻想入りした祝いで宴会をするんだ。」

「えつ? そんなことしてくれるの?」

「ああ。」

なんだかありがたいなー。とても嬉しい。

「だからそれを伝えに来た。」

「分かつた。わざわざありがとう。」

「おう。じやあな。」

そう言つて箸にのつて飛んでいった。

宴会かー!。

楽しそうだなー。

その事をレミリアに話すとレミリアたちも行くと言い出したので博麗神社の場所は分からぬけど、ついて行けば安心だ。

そんなわけで宴会が始まった。

「私はこの博麗神社の巫女博麗靈夢よ。」

「僕は紅魔館に住んでいる神威剣斗だよ。よろしく。
でも巫女にしては露出度が高い服装だな。」

「取り敢えず乾杯ー。」

「「「「乾杯ー!!」」」

酒は何度も飲んでいる。なぜなら記憶を少し取り戻した記憶があつていれば、僕は昔この幻想郷にすんでいたからだ。そのときの記憶で魔理沙や靈夢だけは記憶になかつた。思い出していないだけかも知れないが…

それよりも酒がうまい。

靈夢はもうすでに酔っているらしい。顔と耳が真っ赤だ。

唐突に靈夢が「あんた、 程度の能力は?」と聞いてきた。

程度の能力って何?

パチエに教えてもらうとその人物特有の能力の話である。

「うーん…。」

「分かんないや。」

「分からぬいいいいい?」

「うん。記憶が飛んでるんだ。」

「へえー。そうなのー。」

なんなんだ。このからみかた。酒飲みの親父みたいだ。

チルノが

「はーー。ちょっと暴れたいなーー…。」とか急に言い出した。

どうしたんだこの子は。

ドゴツ!!

鈍い音が響いた。

戦う前に魔理沙にボコられたらしい。

「いっだあああああああい!!!!」

そりやいたいだろ。!!!!!!

ピクツ

「ツ?!」

なんだ今の!!

「どうしたの剣斗?」

「咲夜。今なんか変な感じしなかつた?」

「なにも?」

「そう…。」

なんだつたんだ?誰かに見られているような…:

そんなことを考えていると靈夢が

「剣斗。ちょっとこっちへきて。」

と言つてきた。

「うん。」

そう言つて縁側へ出た。

「剣斗。今の分かつたの?」

「うん。なんだか誰かに見られているような感じがして…。」

「だつて。バレているわよ。出てきなさい。紫。」

靈夢は誰に喋りかけているんだ?紫?だれ?

そんなことを考へてゐるうちに何もなかつた場所に隙間?のようなものが現れてそこから変な女が出てきた。

「あら、バレるなんて靈夢以来だわ。」

ニコニコした人だ::

「あつ私は紫よ今は名字言うのめんどくさいからいわないわねー。」

なんて適當な::。

「僕は神威剣斗。よろしくー。」

「あら、私をBBAつて言わなかつたのはあなたが初めてだわ。」

そうだつたのか::。幻想郷の住人はみんな自由気まだなー。」

そんなこんで宴会が終わり帰つたのはもう夜明けだつた。

そして眠い::。

暗闇の空間…二人の男が話している。

「刀はどうした?」

「ああ。置いてきた。」

「そうか。」

「心配するな。きっと使いこなせるはずだ…。」

「ああ。」

高麗です…。

掲載が遅れてすいませんでした…。

(誰も願っていることではないと思うけど…。)

剣「元気だしなよー。」

ありがとう。

じやあ今日のゲストは十六夜咲夜さんでーす。

咲「よろしくお願ひします。」

咲夜さん二回目だねー。

咲「ええ。とても嬉しいわ。」

それは光榮です。

でもねー僕すごく重大なミスをしてしまつたんだ。

咲「何?」

タグをつけ忘れていた…。

咲「ええ。」

剣「何の?」

れ、恋愛、とか。

咲「れ、れれれれれ、恋愛いいいい

そうだけど…!!どうしたの?そんな~~タ~~?タな反応なんかして。
咲「ち、違う!!!」

剣「へえ!。誰とだれだろー。」

えー。きずかないので?

シヤキン

咲「殺しますよ?」

すいませんでしたああああ

取り敢えず次回予告

咲
一
は、
はい。

剣
—オツケー!!

a)

次回

第5話 樓觀劍・【闇】

次回も

次回も
「お楽しみにー！！！」

白玉楼

第5話 樓觀劍・【闇】

s i d e 剣斗

また新しい朝が来た。

まだ眠い。しかし何故か今日は早く起きないといけない気がする。
嫌々目を覚まして着替えを始めた。

「ふわあ～あ…」

すつごいおおきいあくびが出た。

引き出しから服を出していると、よくわからない剣が出てきた。

「なんだ…これ？」

『私は樓觀劍・【闇】だ。貴様がかつて使っていた剣だ。』

え???

「誰だ!!!誰かいるのか?!!」

周りには誰もいな**り**!!?

『喋っているのは私だ。お前の剣だ。』

「なんかもう訳わかんない…。」

『お前が記憶をなくす前の前のお前の愛刀だよ。』

「へえーそうなんだ。(棒)』

『棒読みやめろ。』

取り敢えず状況把握出来ない。

「僕これからどうすればいいの?」

『自分で考えるんだな。じやあな。』

「いや。ちょっと待って…!』

そこで会話は途切れる。

剣と話すなんて。

刀に近いのか?

取り敢えず着替えないと…!

「これがその刀なの？」

「うん。」

レミリアはそういう。

「これは興味深いわね。」

「興味持たれた…。」

「この刀からは何故か邪悪な氣を感じるのよ。靈力でもない、妖力でもない。なにか別の力…。でも純粹な闇の力だから性質たちの悪いものじゃないわ。」

「はあ…。」

「取り敢えず今日は買い出しを頼むわよ。咲夜は忙しいし、あなたしかいないの。」

「はいはい。分かつたよー。」

こうして俺は買い物に出た。

野菜がないらしい。

まあ良いんだけど。

村への道を歩いていると…。

「あつ！こんな所に！」

空から銀髪美少女が降りてきた。

指は持つてきました横観剣・

【闇】を指している。

「その刀！返してもらいます！」

「ちょ、ちょっと待つてッ！」

背中に背負っていた刀を抜き、僕に斬りかかる。

「なんで斬ろうとするの!?」

「その刀を取り返すためです！」

「この刀って僕のやつみたいだよ!?」

「問答無用！取り敢えず斬る！」

話を聞くつもりは無いらしい。

「そつちがその気なら、こつちだつて本気出すぜ！」
そう言つて俺は刀を抜かずにそのまま殴りつける。

「ぐがつ！」

パタツ

え？

「弱いじやん。」

「迷惑かけてすいませんでした。」

「別にいいけど。」

「まさか封印されていた刀に持ち主がいたなんて思いもしませんでした。」

この子は魂魄妖夢。

白玉楼の庭師らしい。

話を聞くと、つい先日、封印されていた樓觀劍・
ていたらしい。

【闇】の封印が解けて、無くなつ

それを知った幽々子と妖夢は盗まれたと勘違いし、必死で探し回っていたのだと言
う。

そして僕が持つてゐるのを見て、取り返そうとしていたらしい。

でも剣術も中途半端で半人前。できれば教えたやりたいな。

「あの。ご理解いただけたでしょうか。」

「んあ。まあとりあえずわかつた。」

「そこでお願いがあるのでですが…。」

「ん? 何? 出来ることならするけど?」

「私に刀を教えてくれませんか?」

「まあ。いいよ。はつきり言つてそのままじや不安だからね。強いわけじやないけど教える事ぐらいなら出来ると思う。」

「ありがとうございます！」

そう言つて妖夢は鼻歌を歌いながら行つてしまつた。

「何だつたんだろ…。」

買い物が終わり、紅魔館に戻つた僕は、レミリアに事情を言い、出かけることを許された。さあ。

冥界にLet's goだ！

どーもー！高麗です！

随分と長く更新してなかつたので、忘れ去られてるかも知れません。

剣「更新遅くなつてごめんね。」

氣を取り直して、きょうのゲストはこちら！魂魄妖夢さんです！

妖「宜しくお願ひします。」

実はメインヒロイン妖夢ちゃんなんですね！咲夜がヒロインだと思つた人多いんじやないですか？

咲夜もストーリーには深く関係してきますが恋愛要素は妖夢ちゃんがメインヒロイ
ン！タグを見ろ！タグにハーレムつて書いてあるはずだ！

剣「一人で楽しそうだね。」

妖「全くです。」

二人共冷たいなー。

取り敢えず次回予告しますか！

次回！

第6話 教えてください剣斗くん！

次回も

「「「—お楽しみに!!!!」」

第6話 教えてください剣斗くん！

s i d e 剣斗

「冥界に行くって言つたのはいいけど、どうやつて行こうかな。」

張り切つていたのはいいが、冥界への行き方がわからないんだよなあ。

マジでどうしよ。

一人で考えに耽つていると、遠くから声が聞こえた。

「剣斗くん！迎えに来ちゃいました！」

「うん。それはいいんだけど…。」

いいんだけどねえ。

妖夢は僕の上を浮いている状態。

それは、それはつまり。

うん。白だな。

必然的すぎるぐらいにアレが見えてしまう。

顔が熱くなる。

誰が見ても顔が赤くなつていると答えるだろう。自分でも分かるぐらいだ。

「？どうしたんですか？剣斗くん。」

「何でもないよ！何でもない。取り敢えず着陸して？ね？」
「はい。」

すうーっと降りてきて、着地。

「ねえねえ。冥界に行くにはどうしたらいい？」

「そんなの、飛んでいけばいいじゃないですか。」

えーっと。何を言つてるんだこの子は。

「えーっと。飛んでいくつて空を？」

「逆にどこを飛んでいくつもりなんですか？」

確かにそうだ。

空以外に飛ぶところなんてない。

「僕、空飛べないんだよねえ。」

「練習します？」

「空つてそんなにすぐ飛べるようになるもんなの？」

「靈力が少なければ大変ですが、剣斗くんの靈力は異常なほど強いし多いですから大丈夫ですよ。」

「はあ。」

そう言うと妖夢は目を閉じて、

「ではまず、イメージしてください。空を飛んでいるところを。」

「妖夢？」

「ゆーつくり息をはいてー。」

「何ですか？」

目を開けた妖夢は驚愕。

「空飛べたわ。」

「なんかすごいんですけど、これで冥界に行けますね！」

ガツツポーズをする妖夢。

かわいい。

（少年少女移動中）

「おおー。」

冥界に入つて一番最初の言葉がそれだ。

妖夢の横にも飛んでいる、半透明のふよふよしたやつみたいなのが飛んでいる。他には暗かつたりだとか、とても静かだつたりとか。いろいろだ。

「o o h ::」

目の前にドンと構える長い、そう、長すぎるぐらいの階段に思わず声が漏れる。

「この先を行くと白玉楼ですよ。」

「ここも飛んでついいんだよな？」

「はい。何ですか？」

「いや。何でもないよ。」

ただ、足で登らないとバチが当たりそうだつたからさ。

僕は体に靈力をためて離陸する。

さつき飛んだだけでだいぶコツを掴めたと思う。

だいぶ飛ぶの楽だもん。

結構スピードを出して飛んでいく妖夢を追いかける。

あ、これめっちゃ目が乾く。

「さあ！着きましたよ！」

「ここが、白玉楼？」

「そうです！」

無駄にでかいなあ。これ掃除するのとか大変そう。

「言つてなかつたですけど、私はこの白玉楼の主、西行寺 幽々子様の従者。そして白玉樓の庭師兼剣術指南役、魂魄妖夢です。この白玉楼を、ほぼ一人で切り盛りしています。」

「ほぼ一人で？」

「はい。ほんとは家事を手伝つてくれる靈がいるんですけど、ほぼ役立たずなので。」「かわいそうだ。やめたげて。」

「ふふつ。」

柔らかく笑い、こちらを見る妖夢。

何その笑顔、可愛すぎだろ。

「あら、妖夢。帰つてたの？そちらの男の人は？」

「昨日いつた、神威剣斗くんです。」

「あら、あなたが剣斗ね。なかなか男前じやない。」

「こんにちは。これからしばらくここでお世話をになります。よろしくお願ひします。」

「敬語じやなくていいわよ。」

「分かつた。」

この人が西行寺 幽々子か。

ピンク色の髪にふんわりとした笑顔。比較的柔らかめの雰囲気だ。

「あなた。妖夢の剣を教えに来たのよね？」

「んあ。そうだよ。」

「なら一回戦つてみたら？」

「ちよつ。幽々子様！？」

「別にいいけど。」

「よし！決まりね。いきなりだけど、ここで模擬戦を開始します。ルールは弾幕無し。

攻撃は当てずに寸止め。これでいいわね？靈力刃は無し、でも靈力強化はありよ。」

「分かった。」

「戦うんですか？」

「もちろん。」

「では、向き合つて！礼！」

「よろしくお願ひします！」

s i d e三人称

「よろしくお願ひします！」

そう言い、二人はお辞儀をする。

「では、始め！」

幽々子が鋭い声をあげ、模擬戦の開戦を宣言する。

先に動いたのは妖夢だつた。

素早く楼観剣を抜き、踏み込み、ものすごいスピードで間合いを詰める。
「はあッ！」

妖夢は剣斗との間合いを一気に詰めろ楼観剣を縦に降る。

一方剣斗は楼観剣・【闇】を鞘から抜いていない状態。

これはもう妖夢の勝ちだ。と、誰もが思うだろう。

「もらつたあああつっ！」

大きく剣斗に振りかぶる。

キイイインツ

「なつ！」

攻撃が防がれた。鞘から抜いていないはずの楼観剣・【闇】に。いつの間にか抜いている。髪の色も変わっている。

「隙がありすぎだぜ。」

いつの間にか後ろに回られ、攻撃される

が

ギリギリで白楼剣を抜き、止める。

ガキイイイン

急いで妖夢は軸足を回し、剣斗に向きなおす。そして、力一杯踏み込み楼観剣と白楼剣をクロスさせるように切りつけようとした。

一方剣斗は楼観剣・【闇】の一刃だ。

二つの刀を一つの刀で受け止めれるはずがない。

しかし、

ガンガキイイイン

一刀で全ての斬撃を受け止める。かなりの集中力、精神力、そして肉体的な体力が重

要になつてくるのだ。それさえも関係無いように斬撃を受け止める。

「はああああああああああああ！」

妖夢はすでに一心不乱に剣を振り続けているだけだつた。それをまるで未来が見えるかのように受け続ける。

しかし、その戦いにもついに終止符がうたれる。

力アアアアアンツ

「わあっ！」

楼観剣・白楼剣を打ち上げ、楼観剣・【闇】の剣先を妖夢へと向ける。

「勝負あつたな。」

そう言い、剣斗は楼観剣・【闇】を鞘へと戻す。いわゆる納刀というやつだ。
そして剣斗の髪の色も元に戻り、殺氣も消える。

「いやあ。なかなか強かつたよ。負けるかと思つたあ。」

「いえ。剣斗くんには敵いません。もつと修行しないとですね！」

そこに幽々子が入つてきて、

「剣斗。あなた意外と強いのね。ちょっとびっくりしたわ。」

「ありがとう。妖夢もなかなか強かつたよ。ちょっと危なつかしい所もあつたけどね。」
苦笑いしながらそう言う。

「明日からは剣術教えてあげるからね。」
そう言い、妖夢の頭を撫でる。
「んんう。」
かわいい。